

# 崎門学報

第九号  
平成 29 年 1 月 31 日  
崎門学研究会



目次	
一面	靖献遺言を読む(終)
九面	活動報告
十面	崎門列伝⑧唐崎常陸介
十二面	中道三先生誕三百年
十四面	闇齋と垂加
十五面	時論

## 『靖献遺言』を読む(終)

### 巻の七、劉因

次は、巻七の劉因<sup>りゅういん</sup>です。まず『靖献遺言』は巻頭で、劉因の肩書を、巻二の陶潜と同じく「処士」と記しております。処士とは、陶潜の所でも見たように、君臣の大義のなりに世を退いている者のことです。ただ、同じ処士でも陶潜が「晋の処士」と国名を冠しているのと異なり、劉因はただ「処士」とのみ記されております。これはどうしてかと言いますと、劉因は西暦一二四九年、保定容城、現在の河北省容城縣の出身ですが、同地は唐の時代に河東の節度使であった石敬瑭が契丹に割譲して以来、夷狄の占領する所となり、契丹の後には金が、金の後には元が支配するようになりました。つまり、劉因が生まれた時点で、既に河北一帯は夷狄の支配下にあり、一二七九年、劉因が三十歳を迎えるころには南宋が滅んでいきます。こうした現実のなかで、因は世祖フビライの召命を固辞し、漢民族の遺臣としての臣節を貫きました。どの国にも仕えなかったのです、あえて「処士」とのみ記している訳です。若林強齋は『講義』のなか

で次の様に劉因の処士としての生き方を讃えています。いわく「此の時分になって、ことごとく宋と云うのひびきものなり、宋の遺民も絶えて天下中一人として元の民で無い者はない様になつて元の天下となつておることなれば、耳目もあらたまり人心もかわりて夷狄に仕えるをやましいことも思わず惣々？ならわしになつて夷狄に仕えたに劉因一人仕えずして中国の民たるをかえり失わず居られた。爰が大義に明らかかな天下全体の忠義で万世の鑑ぞ。宋にもだいたい仕えぬ人なれば誰がために忠じやと云うて討ち死にせう様もなく飢えて死するの自殺するのと云うことも猶以てないこと故、おるところの地はだいたい中国の地なれば一生夷狄に仕えぬと云うなりに身を終える、ここが劉因の万世の手本になられた処ぞ。」



劉因

『遺言』は、劉因の略歴を次の様に記しています。以下、近藤啓吾先生『講義』の正訳を引用します。

「劉因は字を夢吉<sup>ぼうきつ</sup>といった。保定路の容城の人である。生まれつき才能人にすぐれており、三歳にして書を読むことを識り、日に千字余をも覚え、読んだものは直ぐ暗誦するという有様であつた。されば二十歳にはつたばかりの頃には才能器量、人々を超え、毎日書籍を閲し、古の賢者の如き人物を得てこれを友人にしようと思ひ、『希聖の解』を書いた。劉因は初め、經学を修めるに当たつて訓詁・注釈の説を考究したことであつたが、やがて嘆息するというには「聖人の精細なる義理はここに止まるものではないであらう」と。後宋の周・程・張・邵・朱・呂諸子の書を得てこれを読むや、一見してその微旨を明らかにして「正しい学問はきつとこのようにあることと思つていた」といったことであつた。

面会を避けることが多かったため、その意を知らぬものの中には、傲慢だと罵るものもあつたが、少しも苦に仕なかつた。かつて諸葛孔明の「静もつて身を修める」という語を愛してその家を「静修」と号した。元の世祖(フビライ)が、因を推薦するものがあつたので、召して右贊善大夫に任じたが、やがて継母が老いたことを理由にして辞し歸り、その俸給は全く受けようと仕なかつた。その後、世祖はまた使者を派遣して徴し、集賢学士に任じたが、疾を理由に固く辞退した。世祖はそれを聞き、「昔召さざるの臣といふものがあつたが、劉因はその仲間というべきであらう」といい、その後は無理に招致することがなかつた。至元三十年、四十五歳にて長逝した。そのことを聞いたもの、みな悼み歎いたことであつた。」

劉因は早く父を亡い、継母につかえて孝行であつた。その性格道理をわきまえずに世に調子を合わせた人となつたりせず、家は非常に貧乏ではあつたが、道義に反したものは、少しも受けることをしなかつた。家にあつて子弟に教え、その態度は尊厳であつた。弟子に対してはその才能器量に応じて教えたので、何れも相応に学業を遂げることができた。このようであつたから、歴々の地位にある人物には、保定を過ぎる時、因の名声を聞いてたずねて来るものがあつたが、彼は謙遜して

贊善大夫の贊善は善をたすくの意で、贊善大夫は太子の守役で左右両官がありました。因が一旦でもこの右贊善大夫の役に就いたことについては贊否両論ありますが、綱齋は『講説』のなかで「初めより仕えぬ合点ならばことわりをいつておるなれども、贊善大夫と一たんなつたが疵と通鑑の評などに云えども、これは事体と云うもので、同じくはよいことなれども、元が天下を丸めて是非に召し出だす、その上、禄をも受けぬようにして母をかこつけてかえるなれば、疵はつかぬ。はじめよりつかぬ合点ゆえ禄はうけぬ。その上、元が主のかたきと云うでなし、ただ夷狄

ゆえそれをなげかる。」と述べております。また集賢学士は「学校を提調し隠逸を徵求し賢良を召集することを掌る」ことを掌る役職です。世祖フビライをして「召さざるの臣」と言わしめた劉因は、まさに漢室の正統にあらざれば出仕しなかつた諸葛孔明の語（「静修」）を号するに相応しい清節の士と云えましよう。

## 『燕歌行』

そんな劉因の「遺言」として綱齋が表章したのが『燕歌行』です。燕とは因が生まれた河北一帯を指す地名であり、歌行とは、我が国の長歌のようなもので、感慨を込めて歌う叙事詩のことです。この『燕歌行』は、劉因の生まれた燕の地が、古来歴々たる漢民族の土地であるにもかかわらず、久しく夷狄に占領されたままになっていることを歎いた慷慨悲歌です。以下に本文と、近藤先生の正訳を掲げます。

薊門悲風来る。易水寒波を生ず。雲物なんぞ色を改むる。游子燕歌を唱ふ。燕歌いづれの處にある。盤礴たる西山の阿。武陽燕の下都。歳晩ひとり経過す。青丘遙かに相連なり。風雨差我を墮る。七十齊の都邑。百二秦の山河。學術管樂あり。道義丘軻なし。蚩蚩たる魚肉の民。誰とともに干戈を休めん。往事已にかくの如し。後來復た如何。地を割く更に石郎。曲終わりて哀思多し。

「薊門といい易水といい、いずれも古の冀州のうち、即ち歴々とした中国の地であるのに、久しく他国に奪われたままのこととて、吹く風の声も物悲しく、生ずる波も寒々として、感慨にむせばざるを得ない。見透かす空の色、風景のさま、何故にこのように変わったのであるか。さすらいの人たる拙者は、おのずから燕歌を口ずさまざるを得なかった。されば燕歌はいずこにあつて唱うことか。それは樹々深く茂った丘のとりまいてゐる西山の隈、すなはちその昔燕の下都であつた武陽に於いてである。この地は都として栄えていたが、いまはその影もなく荒れ果てている。そこを拙者はこの歳の暮にただ一人通り過ぎたが、目に入つたものはただ遙かに連なる青い丘、そしてその高く峻しいところも、多年の風雨に崩れてしまつてゐる。思えばこの燕のみでなく、その東に連なる齊の国には七十の郡邑が栄えており、西に連なる秦の国には百二の山河があつてその守りを固くしていたということがあるが、いまはそのいずれも燕と同じように他国のものとなり、かつての學術を誇つた管仲・樂毅のごとき人物、その道義を仰がれた孔子・孟子のごとき聖賢も現れることなく、そのため愚かな民衆は、戦よりのがれて平和を楽しむ希望も持てない。これまでのさまがこのようであつたが、この後も果たしていかになりゆくことであろうか。そもそも中国がこの悲しい姿になつてしまつたのは、経緯あることではあるが、かの石郎が

地を割いて契丹に与えたことによつて決定的となつたのである。それを思えば嘆息は深く、されば一曲を唱い終わつたものの、悲哀の心はいよいよ増したことであつた。」

綱齋は、『燕歌行』の結末の二句「地を割く更に石郎。曲終わりて哀思多し。」について、「尤も然として因、身、幽燕故地の気類生族たるを以て、高陵逸挙、戎虜異属に汚染せらるるを肯ぜざるの本心を見るべし。特に濁世を傲睨し爵禄を涕唾するのみならざるなり」と記し、劉因の進退をその志の根源において見、単に俗塵に憤り利禄を嫌つたという皮相な見方を斥けております。

筆者は、この『燕歌行』を読むたびに、アメリカと云う夷狄に占領された我が国の悲哀に想いを重ねざるを得ません。周知のように、戦後我が国は、一九五一年のサンフランシスコ講和条約で名目上の独立を回復しましたが、実際には、現在も五万人近い米軍が、沖縄を始め全国に蟠踞し、占領体制が継続しております。しかるに、戦後七十年以上が経過するなかで、こうした現実には、戦後生まれが大半を占める現在の国民にとっては最早所与の前提となつており、まさに強齋が云うように「耳目もあらたまり人心もかわりて夷狄に仕えるをやましいこととも思ふ」ぬ時勢になつてしまいました。このように、我が国民が、夷狄の占領を恥ずかしいとも思わなくなつたのは、アメリカ由来の「自由や民主主義」を普遍的なものと錯覚し、我が国体の尊

厳なる所以を忘却した結果、自主独立の気概を喪失したからです。国家の軍事的従属は、民族の精神的従属に基づくものであり、国民精神が外来思想に汚染侵食され、固有の国体に対する自覚が失われた結果、引き起こされるのです。

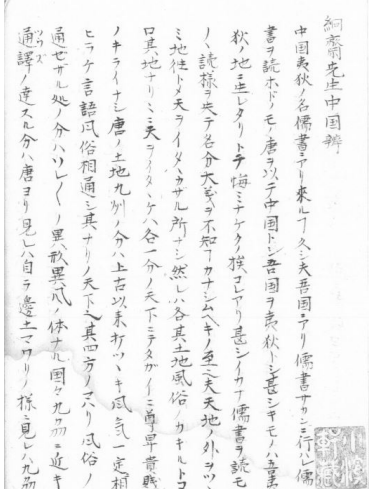
江戸時代においても、徳川幕府が朱子学という外来思想を導入した結果、シナを中国「尊貴とし、我が国を夷狄」卑賤となす慕華（夏）主義が蔓延しました。荻生徂徠が自らを「東夷」と称したことなどその最たる例ですが、こうした弊害に対して山崎闇斎が、「もし孔孟が我が国に攻めてきたならば、干戈をとつて生け捕りにしてしまえ」と云つて崎門学を創始したことは前に述べました。そして綱齋も、『講義』における劉因の章に、「中国弁」と題する一篇を収め、華夷内外の別を明確に正しております。この「中国弁」は、彼の正統論と並び、綱齋の学説の根幹をなすと思われまので、長文ですが以下に全文を掲げ、読者の参考の用に供したいと思ひます。

## 『中国弁』（原文旧字片仮名）

「中国夷狄の名、儒書に在り来ること久し。其れ故吾国に在て、儒書盛んに行れ、儒書を読む程の者、唐を以て中国とし、吾国を夷狄とし、甚き者は吾夷狄の地に生れたりとして、悔み歎くの徒之有り。甚だしきかな。儒書を読む者の読み様を失て、名分大義の実を知らざること、哀れむ可きの至りなり。



夫れ天地の外をつつみ、地往くとして天を戴かざる所なし。然れば各其の土地風俗の限る所、其の地なりなりに天を戴けば、各一分の天下にて、互いに尊卑貴賤の嫌いなし。唐の土地九州の分は、上古以来打ち続き風氣一定相開け、言語風俗相通じ、自ずからそれなりの天下なり。其の四方のまわり風俗の通ぜざる所の分は、それぞれの異形異風の体なる国々、九州に近き通訳の達する分は、唐より見れば自ずから辺土まわりの様に見うれば、九州を中国とし、外まわりを夷狄と称し来る。其れを知らずして、儒書を見、外国を夷狄と云う様、有とあらゆる万国を皆夷狄と思ひ、嘗て吾国の固より天地と共に生じて、他国を待つことなき体を知らず。甚だしき誤なり。或る人曰く。この説尤も明らかに正しく、千載の蒙を啓く。名教の益何か是に如ん。去りながら疑う可きことあり。一々はを問わん。



『中国弁』

夫れ唐九州礼儀の盛んなる、道德の高大なること及ぶべきことなし、然れば中国を主にして夷狄これを慕うこと、自ずから其の自体相応たるべし、曰く先ず名分の学に道德の上下を以て論すること置き、大格の立ち様を吟味すること第一なり。されば徳の高下かまわず、瞽叟の頑といえども、舜の父たること天下に二つなし。舜吾親は不徳なりとて、我と賤しみ、天下の父の下に付かんと思ふ理なし。ただ己が親に事へ、終に瞽叟を底して、却つて天下の父子定まる様に成りたるは、舜の親に事するの義理の当然なり。さあれば吾国に生れて、吾国たとえ徳及ばざるとて、夷狄の潜号を自ら名乗り、兎角唐の下に付かねば成らざる様に覚え、己が国の戴く天を忘るるは、皆己が親を賤しむる同然の大義に背きたる者なり。況や吾国天地開けて以来、正統統き、万世君臣の大綱変わらざること、是三綱の大なるものにして、他国の及ばざる所にあらずや。其の外武毅丈夫にて、廉恥正直の風天性に根ざす。是れ吾国の勝れたる所なり。中興よりも数々聖賢出でて、吾国を能く治めば、全体の道德礼儀、何の異国に劣ること有らん。其れを始めより自ら片鱗の如くに思ひ、禽獸の如くに思ひ、作り病をして歎く輩、浅ましきことにあらずや。是を以て見れば、儒書説く所の道も、天地の道なり。吾学んで開く所も、天地の道なり。道に主客彼此の間なければ、道の開けたる

書に就いて、其の道を学べば、其の道即ち我が天地の道なり。たとえば火熱く水冷たく、鳥黒く鷺白き、親のいとおしく君の離れ難き、唐より云うも、吾より云うも、天竺より云うも、互いにこちの道と云うこと無きが如し。其れを儒書を読めば唐の道々として、全体風俗ともに正念を遷され、手をあけて渡す様に思い違えるは、皆天地の実理を見ずして、聞見の狭きに遷さるる故なり。

或ひと曰く、是れ尤も著し。去りながら九州の大国、吾が日本の小国、何として同口に有るべき。曰く、是亦前説の通りにて何の疑うことなし。左様に云はば、せいの高き親は親にて、小男も親は賤しいに成るべきや、大小を以て論じること、全く利害の情より出る故なり、況や万国の図を以て見れば、唐の幅はわずか百分の一にも及ばず、唐を十程合わせたる国幾個もあり、其れを中国と立て、唐を夷狄と云わば、唐人服せんや、或る人曰く、是亦明らかなり、然るに周礼土圭の法有りて、日月の影を測れば、嵩嵩山中国に当り、日月の景全きと云えば、天然自然の中にあらずや、曰く其れも唐の真ん中にて云えばその通りなり、日赤道をくるりとまわれば、赤道の下通り何れか日影の中にあらざらん、所々にて日中の影を測れば皆同じことなり、且つ楚呉の地などは古夷狄の地にて、孟子にも南蛮鵠舌と譏つてあり、春秋にも夷狄に

会釈つてあり、去れども、周の末呉楚次第に繁昌して唐と張り合い、秦漢以後、歴々の中国となり、南北朝以来は、天子の都となり、後は朱子なども建人なれば、則ち古呉楚の地にて、今は中国中国と云うのかぶなり、すれば、唐の地開闢以来そろそろと切り広げ、其の声教威勢の及ぶだけ程つつ、広がれば、一天子にて統べ治まるなりを中国と立て来たりたる者なり。此の末韃の地天竺の地も次第次第に治まりて、唐の天子より江南の如くにならば、唐人の口よりは皆中国と云うべし、すれば土圭の影の穿鑿もいらず、只風化の及ぶ所にて云うより外のことなし、且つ三苗の国、淮夷徐戎の類則九州の境内にて、其のまま夷狄にしてあり、況や万国夥しき国なれば、舟車の及ばざる所、又何様聖賢の有りに治むるも知らず、それを頭から中国と云うからは、ひしと夷狄と会釈つて賤しむこと甚だ以て偏私なり。

或る人曰く、是亦誠に異議の云われざることなり。去りながら春秋の説を以て見れば、中国の教えに従うは中国を以て会釈い、夷狄にて変ずること能わざれば、夷狄にすると有れば、風化の及ぶ所皆中国と云うこと明らかなることにあらずや、曰く其れなれば、唐九州も皆稚を左にし言侏離ならば、頓と夷狄と名付くべきや、徳を以て夷狄と云えば、九州も徳あしくなれば夷狄に成り、日影を以て云えば九州より外に徳堯舜に成

りても夷狄の名ははげぬに成る、是皆矛盾す、又大小を以て云えば、唐より大きな国有り、開闢を以て云えば、各国面々の開闢なり、どちらよりどう論じても、唐を中国とし、其の外を皆夷狄と賤しむこと、一つとして理の通ずることなし、皆是儒書を読む者の眼力明ならず、見識大ならざるの弊なり。

或る人曰く、加様に聞けば粉るること更になし、然らば聖人中国夷狄の説は皆式わけなしに我国鼯鼠に私を以て云いて、今聖賢の道を学ぶ者、皆用いざる所か、曰く是さきに云う如く、其の国に生れて、其の国を主とし、他国を客として見れば、各々その国より立つる所の称号有る筈なり、道を学ぶは実理当然を学ぶなり、吾国にて春秋の道を知れば、則ち吾国即ち主なり、吾国主なれば天下大一統のなり、吾国より他国を客と見る、即ち是孔子の旨なり、それら知らず、唐の書を読むから、唐鼯鼠に成りて、兎角唐からながめる日本のなりに遷り覚えて、兎角夷狄夷狄とあちへつられる合計りするは、全く孔子春秋の旨とあらはなり、孔子も日本に生るれば、則ち日本なりから春秋の旨は立つ筈なり。是則ちよく春秋を学びたると云う者なり、すれば今春秋を読んで日本を夷狄と云うは、春秋の儒者をそこなうにはあらずして、よく春秋を読まざる者の春秋をそこなうなり、是則ち柱に膠して琴を調うるの学と云う者、全く

窮理の方を知らざる者なり。

或る人曰く、かくの如くならば、あすが日唐より堯舜文武の様なる人来て唐へ従えと云わば従わざるか、然るべきか、曰く是言うに及ばざることなり、山崎先生嘗て物語りに、唐より日本を従えんとせば、軍ならば堯舜文武が大将にて来るとも、石火矢にても打ち潰すが大義なり、礼儀徳化を以て従えんとするとも、臣下と成らざるがよし、是則ち春秋の道なり、吾が天下の道なりと云えり、甚だ明らかなることにて、許魯齋が宋を徳で服させんと云うが誤りと同じことなり。古より吾国遣唐使をつかわされ、足利の末に唐の勅封を拝受するあ、皆名分を知らざるの誤りなり、もし唐に従うを好しとせば、吾国の風俗を更えて、頭をあげぬが大義なるべし。其れなれば吾親を

人の奴僕とし、乱賊の名目を付け、踏みつけ賤しむる同事の大罪なり、況や吾国にて各其の徳修まれば、各国にて道行わるるのなりにて好き筈なり、漢唐以来徳の是非管ず、兎角唐の下に隸かまわけば、好い国じやと褒めて有るは、皆唐国を主とするより云いたる者なり、吾国も吾国を主として他国従い附けば撫按するがよし、此の方より強いるにあらず、其れより唐より日本を取ろうとするも誤り、日本より唐を取ろうとするも無理なり、さて又三韓国の如きは、吾国より征伐して従えたる国ならば、其の為に今に吾国へ使を通じ、帰服する、是吾国の

手柄なり、又三韓の国より云わば、面々の国を立て主とするがあの方の手柄なり、吾親を無理にても、人に頭をはらせぬが其の子の手柄なり、人の親は其の親を人に頭をはらせぬが手柄なり、面々各々にて其の国を国とし、其の親を親とする、是天地の大義にて、並び行い戻らざる者なり。

或る人曰く、然らば何れの国にもせよ、極めて風俗悪しき韃靼の類などは如何有るべき、曰く左ればのこと、前云う通り、皆其の国の心がけ有る者は、其の国を道を以て明らめ風俗正しくなれば舜の瞽叟豫を底すと同じことなり、去りながら其の間ともに徳を以て言う故なり、風俗はともあれ、何であらうと先ず吾国は吾国なりの天地なり、其の説前に言う所の如し。

或る人曰く、然らば日本を中国とし、唐を夷狄として好からんか、曰く、中国夷狄の名、其れ共に唐より付けたる名なり、其の名を以て吾国に称すれば、其れともに唐の真似なり、但吾国を内とし、異国を外にし、内外賓主の弁明なれば、吾国と呼び、異国と云えば、何方にても皆筋目違わず、此の他言うべきことあれども、皆前の筋にて推せば、往として明らかならざることなし、予前日本を中国とし、異国を夷狄とすることを述べと云えども、中国夷狄の字に付いて紛々の論多ければ、今又名分をつめて論すること此の如し。

或る人曰く、然らば孔子世に出でて、兎

角唐は中国なり、どこもかも外は皆夷狄なりといはば如何、曰く其れが孔子の旨ならば、孔子といえども私なり、吾親を兎角きたなそうに云うが道じやと云えば、孔子の詞でも用いられず、されども孔子なれば必定左様に云わぬ筈なり、其の証拠はと云えば春秋なり、其の旨前に言う所の如し。劉因中国の一段も、又劉因が日本人なれば、則ち日本が本国にして異国に仕えざる筈なり、義理は其の時其の地それぞれの主とする当然を知ること、是中庸の正義第一なり、されども儒者中国夷狄の説、滔々として皆然れば、今更遽に合点の明らかに有るべきこと無けれども、此の義大名分、大正統、三綱五常君臣彼此の大大大義はより大なること無ければ、此の筋明らかならざれば儒書を読んでも乱賊の類に落ち入ること、極めて歎くべきこと、能々詳らかにすべき者なり、畢竟中国夷狄の字、儒書に在るからして加様に惑う、儒書を読まざるときは其の惑いなし、大凡儒書を学んで却って害を招くこと、湯武の君を伐つこと苦しからずと云い、柔弱の風を温和と云う様なこと幾個もあり、皆儒書の罪にあらず、儒書を学ももの読みぞこない、義理の究めぞこないなり、聖賢天地の道を聞き、万世に示せば、儒書の様な結構なる義理は云うに及ばざれども、学びそこなえば加様の弊あり能々省み窮むべきことならずや。

此大条元禄辛巳十二月二十一日改記



## 『中国弁』の改定

この『中国弁』の最後には「元禄辛巳」すなわち元禄十四年（千七百一十一年）と記されていますが、『中国弁』を収める綱齋の『講義』が筆録されたのは、『遺言』が上梓された翌年の元禄元年であり、その間十四年のブランクがあります。一体この間に何があったのでしょうか。

実は、『講義』の別の写本では、「元禄二年」の日付が記された『中国弁』が存在し、さらに別の『講義』では、『中国弁』と同じ「中国夷狄の名、儒書に在り来ること久し。」で始まり、論旨も重複する長文が『中国論』として収められています。近藤先生曰く、「実は、後の『中国論』は『中国弁』と題し、これのみを収めた写本が別に伝えられていて、同書には、「此の一条、元禄辛巳十二月二十一日、改めしるす」という識語が添えられている。元禄辛巳は同十四年である。綱齋は前論を講じた十二年の後、改めて敷衍改定を加えたのである。」と述べられています（『浅見綱齋の研究』『中国弁の改定』）。

しかし、その改定の眼目は、『中国弁』にある「中国夷狄の名、其れ共に唐より付けたる名なり、其の名を以て吾国に称すれば、其れともに唐の真似なり、但吾国を内とし、異国を外にし、内外賓主の弁明なれば、吾国と呼び、異国と云えば、何方にても皆筋目違わず、此の他言うべきことあれども、皆前の

筋にて推せば、往として明らかならざることなし、予前日本を中国とし、異国を夷狄とすることを述べと云えども、中国夷狄の字に付いて紛々の論多ければ、今又名分をつめて論ずること此の如し。」の語からも伺い知ることができます。ただし、綱齋は、朱子の説く「華夷」の別が、狭隘な慕華主義に陥ることを危惧し、あえて「華夷」ではなく「内外」と呼んでその語弊を斥けたのです。

かくして綱齋が『中国弁』を改定した背景には、元禄十二年、十三年の頃に垂加派の跡部良顕あとよしかきとの間で交わされた熾烈な問答がありました。良顕は綱齋に宛てた問目のなかで、綱齋が、我が国がシナと同様に、各々の天を戴く国であるからは、そのとき徳のある国が中国だと述べたのに対して、シナを中国と一定した聖賢の論を歪曲するものだといって激しく非難しました。問答のなかで、綱齋が自国を我が親に例えて、「賢でも愚でも、貴でも賤でも、吾父母は吾父母にて立てたと同じことなり」と述べたのに対して、良顕は「例えば親に孝をするが道なれば、親のことを大切に、人に悪うも言われぬと思うに、親が盗みをしたを、人が盗人じゃと云うを、いや吾親は賢人じゃと臂を張って云う様なものなり。如何に孝じやとて、賢人とは云われぬことなり。」と反論すると、綱齋は「況や親と尊ぶからは、猶以て貧富貴賤大小賢愚のかわりはありとも、一言のはずかしめも人の下につけるはずもなき筈にて候えば、別して自

ら夷狄夷狄と云うは、人に吾親を盗人と云われてわれが親は天地不易の盜の名と覚えてい様なるものなり」と述べ、これに駁しています。

我が親を盗人と云って憚らない、こうした良顕の考えは、「臣子、君父の不是底を説くの道理なし」とする『拘幽操』の精神と明らかに矛盾しますが、それは当時良顕が服していた佐藤直方の意を受けたものであると云われます。直方が崎門三傑の一人と称されながら、『拘幽操弁』のなかで湯武放伐を是認したことは前に述べましたが、彼は綱齋の『中国弁』に対しても『華夷論談』を著し、そのなかで「元来中国夷狄と云うことは中国の聖賢の言にして、天地全体の地形について立てたるなり」と述べ、徳の盛衰や風俗の善悪とは無関係に一定したものであることを述べ、さらに「中国夷狄を道德の盛衰で云わば、今は唐が中国、今は朝鮮が中国と、ひと場所が変わるべし。人が何程不徳不義とて、真の犬馬とは云われぬ。わるなりに人は人、犬は犬なり。猿がかしこきとて、たわけの人間と同じこととは云われぬ、鸚鵡おうぶはよく言うも、飛鳥を離れざるなり。」と述べております。

こうした直方の意を受けた良顕による執拗なまでの問目に対して、綱齋が繰り返し説いたのは「（一）中国といい夷狄という語は、漢人に於いて、自国・他国の区別をする時の必要から名づけたものであり、（二）天地間、いずれの国も、それぞれ同じ日月を戴いて独

立しているのであるから、上下の差別はないはずであり、（三）ましてわが国は、外国に恥ずることなき国体を有する故、（四）漢土で我が国を夷狄と呼んでいるからといって、これを消すことができないものと考えているのは誤りであり、（五）日本に生れたる者は、日本を主体とするのは当然であって、なまじ彼の真似をして中国・夷狄という名を用いんとする所より問題も生ずるものであるから、かくの如き語の使用を止め、自国を主体とし、自国外国の主客の名分を明らかにするがよいということである」ということ（近藤先生「中国弁改定」）であり、『中国弁』はこうした議論の変遷の結果改定されたもののなのです。

## 万国共存、異民族尊重の境地

筆者は、この『中国弁』改定が、崎門学の発展に於いて大変重要な意味を持つと考えます。というのも、我が国に導入された朱子学は、たしかに上述した様な慕華主義の弊害を来しましたが、一方で本居等の国学派は、儒教の説く礼儀道德は、我が国の古道に本来備わっているものとし、これを言挙げすること「からごころ」や「さかしら」と云って斥けたために、かえって現状の不義無名を正す変革思想としての力を失い、我が国を以て唯我独尊となす、夜郎自大の説と化した節があります。本居宣長は、『直毘靈なほびのたま』に対する儒者の批判に対する反批判として書いた『葛花くすはな』のなかで次のように説いています。

「難者の尊む処の漢国こそ、皇国より見れば、貴賤のすぢも別たず、君臣の道もたゞざれば、鳥獸には近けれ、皇国はかたじけなくも、天照大御神の御国として、天皇は即ち大御神の御子にましませば、下が下まで人草の心も何も、万国に勝れて、もとより君子父子その余の道も、おのづから備りたる故に、殊さらにこれをいひたてて、教えさすにも及ばざりし程の事なるに、いかでか外国聖人の道をしも待ことあらん、異国は大御神の御国にあらざるが故に、悪神ところをえて、万の事あしく、国も人も治まりがたき故にこそ、さまぐの名を設けて、教へさとせるなれ」。つまり、我が国自然の道は、シナ造作の道よりも優れているということです。



本居宣長

たしかに、儒学の説く三綱五常の道義は、禪讓放伐の絶えないシナよりも万世一系の天皇を戴く我が国において純粋に体现されており、そのことは『中国弁』でも「吾国天地開けて以来、正統続き、万世君臣の大綱変わらざることを、是三綱の大なるものにして、他国

の及ばざる所にあらずや。」とある通りです。したがって、突き詰めて考えれば、むしろ我が国こそ中国であり、シナや他の国は夷狄であるとも言えそうですが、綱齋はそこまでは行かず、むしろ各国の道徳的な多元性を認め、「中国夷狄」の用語が無用な混乱を招くとして、これを「内外賓主」の用語に置き換えているのです。

このように、『中国弁』の改定によって、綱齋は、儒学の卑屈と国学の尊大というそれぞれの弊害を克服した、万国共存、異民族尊重の境地を示したのであり、そのことは、後年、明治以降に至って、崎門学の学統からアジア独立を志す多くの大アジア主義者を輩出した事実とも無縁ではないと思うのです。なお、崎門学と大アジア主義との因縁については、筆者が主宰する大アジア研究会の機関紙『大亜細亜』に寄稿した別稿（崎門学と大アジア主義の関係について）をご参照ください。

### 巻の八、方孝孺

最後に、巻の八、方孝孺（ほうこうじゆ）です。前巻の劉因のところで見た中国論では、民族間での正統が問題となりましたが、ここでは王朝内での正統が問題となります。

方孝孺は字を希直と云い、浙江省の出身です。幼少より聡明で読書に励み、文才に優れたことから「小韓子（韓退之）」と呼ばれました。彼は十六歳の時、父に随伴して周公

旦や孔子の古跡を見て回り、学に志すと、宋濂という儒者に師事して朱子学を修めました。その学は、綱齋が「文藝を悦ばず、恒に正道を明し異端を闢くを以て己が任とす。」と記すような、厳格なものでした。後に、明の太祖洪武帝に召されて都南京に赴き、洪武帝二十五年には、漢中府という地方政庁に置かれた学校の教授に任命されました。その後、洪武帝が崩じ、早逝した太子標、すなわち懿文帝の子、允熹が即位して建文帝となると、孝孺は太祖の遺命により幹林博士、次いで侍講、さらには直文淵閣（宮中書庫の儒官）に任じられました。



方孝孺

ときに、懿文帝の弟で太祖の第四子である棣（たい）は、燕王として北平（北京）におり、兼ねてより天下篡奪の野心を抱いていたところ、建文帝の近臣である齊泰や黃子澄等が諸王の勢力を削減しようとしていることを口実として反旗を翻し、兵を率いて南京に迫りました。その際、死を覚悟した孝孺が賦したのが『絶命の辞』であり、綱齋はこれを孝孺の遺言として表章しています。「絶命の辞」の意味に

ついて、綱齋は、「一生の息引きとるときは、誰とても死なぬものはないが、わけがあつて義に死ぬるときは書き捨てのようによくおく辞なり。」と述べています（『講説』）。以下に本文と近藤先生の正訳を掲げます。

### 『絶命の辞』

天、乱離を降し、孰かその由を知らん。姦臣計を得、国を謀り、猶を用ふ。忠臣憤を發し、血涙こもこも流る。死を以て君に殉ふ、そもそも又何をか求めん。ああ哀しかな、庶はくは我を尤めざらん。

このたびの大乱は天が降されたこと、とても人間わざではないが、どうしてこのような禍を下されたのやら、誰れもその理由を知るものはない。奸邪なる燕王のごとき人物が志を得て国家の政治を計るようになり、そのような時節故、忠臣は憤りを發して泣き、血と涙とこもこも流れることである。いまとなつてしまつては、死して我が君のお供をするのみ、この外には何の求めるものがあるう。まことに哀しむべきことである。しかしこういふことであるから、不忠不義にて君に背いたという尤めは、受けぬことであらう。

孝孺は、建文帝に一旦都落ちを勧める諸臣に対して、あくまで徹底抗戦を主張しましたが、味方の裏切りもあつて、ついに南京は陥





永楽帝

落し、帝は宮城に火を放ち、服装を変えて都を脱出しました。ときに建文四年六月のことでした。都に入城した棣は、建文帝の太子奎を廃して庶人になると自ら帝位に就きました。これが太宗永楽帝です。棣は孝孺の声望を惜しみ、皇帝即位の詔書を彼に書かせようと面前に引き出しましたが、孝孺は喪服を着て棣の不義を難詰し、筆を投げてこの要請を拒絶しました。これに激怒した棣は、孝孺の宗族を皆殺しにすること八百四十七人に及び、両親の墓を打ち壊したうえ、母や妻の一族や朋友門人まで、悉く捕らえて殺しました。さらに城外で磔にした孝孺の口の両側を耳まで切り裂きましたが、彼は棣を罵るのを止めず、七日目にしてようやく死にました。享年四十六でした。孝孺の死後、彼の著作はほとんど焼き払われましたが、五十年の後に禁制が緩むと、同郷の学者が彼の遺文を集めて一篇とし、孝孺の書斎の名を取った『遜志齋集』として刊行され今日に伝わっております。

### 朱子学の「三大不幸」

ところで、初め燕の兵が長江を越えると、建文帝に仕えていた群臣たちは、こぞつて朝廷のために死ぬことを誓いましたが、いざ棣が都城に入ると、態度を一変させ、節を捨てて棣に臣従しました。黄福、鄭廣、胡廣や金幼孜等もそのうちの一人であり、彼らは棣に媚びを売って重用され、永楽十二年には棣から『五経大全』、『四書大全』、『性理大全』の三大全の編纂を命じられました。しかし、この大全編纂は、そもそものが、棣による帝位篡奪を糊塗する不純な動機に発していたため、朱子学の教義を骨抜きにし、以後それが単なる科挙の試験科目、訓詁詞章の学に墮す原因ともなりました。

実は、徳川幕府が明から導入した朱子学は、かくして永楽帝によって換骨奪胎された『大全』中心の朱子学であり、これに対して朱子学本来の姿を回復しようとしたのが山崎闇斎ということです。強齋は次のように述べています。「さて大全を云い付けて纂めたは、先づ己が謀反したものゆえ、名を飾りはばなことをして悪を掩うつもりに聖学を明かすと云い立てて、残らず全いようにとある心で大全と云うをあらわしたぞ。是から経学がそこねたぞ。朱子の本書どもも、このときの不忠不義な學術を根から知らぬ俗学どもが寄つて汚し、そこねたぞ。秦火以来の聖学のそこねと云うはこのときぞ。さて大全は万世不忠不義

の棟梁、学をそこなう第一番、孔孟程朱の罪人。日本へあのようなめつそうな、『或問』『輯略』もつかぬ『四書』が渡りたは、皆大全以後の書が渡りた故ぞ。『性理大全』、めつそうな何の役にたたためもの。『五経大全』は猶以てのこと。……其のようなわけを合点して其の非を知るは、山崎先生の御蔭とおぼえたがよい。」(『講義』)

綱齋は『遺言』のなかで、朱子学の「三大不幸」として、一、宋の理宗の即位の事情と大儒と仰がれた真徳秀の態度、二、朱子学の大学者と称せられた許衡の出处に次いで、三に、上述した明の永楽帝の即位の経緯を挙げおります。南宋の寧宗皇帝が崩じた際、首相の史彌遠は、太子の竑を廃して、沂王の貴誠を新帝に擁立しました。これが理宗です。真徳秀は、第三代光宗のもとで大学博士を務めた碩学でしたが、史彌遠の権勢を嫌い、地方で勤務しておりました。しかし、新たに理宗が即位するとその召命に応じ、この度の皇位継承は人倫にもとるとして帝に苦言を呈しながらも、結局、官職は去りませんでした。これと対蹠的に、朱子の門人である李燾は、寧宗の時代に潭州の通判(州の政治を監督する官)をしておりましたが、竑の廢太子を聞いて官職を退き、これを惜しんだ真徳秀等の推薦を全て辞退し、ついに理宗に仕えませんでした。真徳秀は、『大学衍義』を著した大儒として仰がれておりましたが、綱齋はその出処進退が道義に反するとし、あえて李燾の進

退と対照することで批判を下したのでした。二の許衡は、劉因と同時代の大儒ですが、元の召命を拒否した劉因とは対照的に、元に仕えたことから、後に闇斎は、『魯齋考(魯齋は許衡の号)』を著してその出処進退を批判しました。三は、以上で述べた通りです。

このように、三綱五常の道義を打ち立てた朱子学が、その後、奸臣どもによって、己の悪逆を掩う口実として利用されたことは、朱子学にとって大きな不幸でしたが、一方で、その都度、李燾や劉因、方孝孺といった義烈の士が現れ、守るべき道義が明らかにされたのはかえって慶賀すべきであると、綱齋は述べております。朱子自身も、時の権力者であつた韓侂胄の忌憚に触れて偽学の烙印を押され、高弟の蔡元定は朱子の身代わりとなつて流謫されています。本編を終えるにあたり、綱齋は、孝孺が記した「朱子の手帖に題す」と題する文を収めておりますが、これは、朱子が蔡元定の減刑を請うて書いた文に、孝孺が後書きしたものであり、そこには、君子と小人を一時の勝負で較べれば、小人は常に盛んで君子は常に衰えているように見えるが、長い歴史で見れば、悪は正義を覆い隠すことは出来ず、破邪顕正は必然であるということが記されています。綱齋は、偽学の禁を受けた朱子と、その朱子の学に殉じた方孝孺の受難を重ね合わせ、さらには自らの学問も、いつかは幕府の妨害を払い除けて後世に君臣の大道を明らかにすることを念じたのでしょ

う。

## 我が国における正統論の問題

さて、これまで『靖献遺言』が記す、方孝孺の事績と遺言をみましたが、燕王棣が建文帝から帝位を篡奪した変乱を我が国の歴史に徴したときに思い浮かぶのは、やはり壬申の乱でしょう。いうまでもなく、壬申の乱は、

天智天皇の死後、太子である大友皇子から、皇弟である大海皇子（後の天武天皇）が皇位を篡奪した変乱のことです。君臣の義に照らせば、篡奪者である大海皇子には正統性がなく、大友皇子こそ正統とも思われますが、我が国の史書は『日本書紀』や『神皇正統記』など、天武天皇を歴代天皇に数える一方で、大友皇子は入れておりません。これに対して徳川光圀の『大日本史』は、大友皇子を「天皇大友」として歴代天皇に数え、『大日本史』の論贊として安積澹泊が著した『大日本史贊』では、天皇大友について、「是を是とし、非を非とする、天下の公論なり。壬申の事に至りては、举世能くその是非を弁するものなし。大友の鴻業、鬱して暢びず、隠れて彰れず。嘆ずるに勝ふべけんや。」と記し、また

天武天皇については、「逆にとり順に守るとは、蓋し陸賈が権時の語にして、聖人の大経にあらざるなり。遂に姦雄をして、口を湯武に藉り、用つて其の私を済すことを得しむ。後世視て以て常となし、恬として怪しむを知らず。嗚呼、之を取ることを、固より逆にすべ

からず。而も況や骨肉の間に於いてをや。」と記し、言を極めて天武帝の不義を責めております。しかも、それでいて天武天皇は天子のままなのです。後年、明治三年に至り、大友皇子は、政府から正式に天皇として認められ、「弘文天皇」の諡号が追贈されております。こうしたことの背景には、いかなる事情があるのでしょうか。

同様のことは、我が国の南北朝時代についても言えます。後醍醐天皇に謀反を起した足利高氏は、持明院統の光明天皇を北朝の天子に擁立しました。よって、君臣の義に照らせば、後醍醐方の南朝が正統で足利方の北朝は閏統ということになりますが、現在の皇室が北朝の血を継がれていることもあり、「南北朝正閏問題」は明治政府も態度を決めかねておりました。

## 『保建大記』へ

このように、同じ天照大神の血筋を継ぐ皇統のなかでも、君臣の義における正統と閏統の問題が存在しますが、その際、闇齋、綱齋以降の崎門学派は、皇位の正統の源泉を「三種の神器」に求め、後に水戸学が大友皇子を正統の天子と認め、南朝正統の立場を確立し、さらにはそれが明治政府の公定史観として受け継がれていく上で極めて重要な役割を果たしました。特に、崎門の学統を継いだ栗林潜鋒は、『保建大記』を著して「三種の神器」を以て正統とする立場を明らかにし、潜鋒が

徳川光圀に招聘され『大日本史』の編纂に参画するに及んで、水戸学の南朝正統論確立に大きな影響を及ぼしたとされています。こうしたことから崎門学では、この『保建大記』を浅見綱齋の『靖献遺言』と並ぶ重要な古典としております。そこで以下では、この『保建大記』を読み解き、我が国における正統論の問題を考究しようと思います。（文・折本）

## 栗山潜鋒『保建大記』を読む会のお知らせ

『保建大記』は、崎門の栗山潜鋒（一六七〇―一七〇六）が元禄二年（一六八九年）に著した書であり、『打聞』は、同じく崎門の谷泰山が『保建大記』を注釈した講義の筆録です。崎門学では、この『保建大記』を北畠親房の『神皇正統記』と並ぶ必読文献に位置づけております。そこでこの度弊会では本書（『保建大記』）の読書会を開催致します。詳細は次の通りです。

- ● ●
- 日時 平成二十九年一月二十八日（土曜日）
- 場所 弊会事務所（〒二七九の〇〇〇一千葉県浦安市当代島一の三の二九アイエムビル五階）
- 連絡先 ○九〇（一八四七）一六二七
- 使用するテキスト 『保建大記打聞編注』（杉崎仁編注、平成二二年、勉誠出版）

## 坪内顧問新著紹介

『GHQが恐れた崎門学―明治維新を導いた國體思想とは何か』



弊会顧問の坪内隆彦氏による待望の新著が刊行された。その名も『GHQが恐れた崎門学―明治維新を導いた國體思想とは何か』（展転社）である。

本作は、幕末の志士たちに影響を与えた五冊の書として、浅見綱齋の『靖献遺言』、栗林潜鋒の『保建大記』、山県大弼の『柳子新論』、蒲生君平の『山陵志』、頼山陽の『日本外史』を取り上げ、それぞれの史的背景や根底思想について論じながら、全体として、崎門学という思想のメインストリームが浮かび上がる内容になっている。

来年、明治維新から百五十年を迎えることから、巷間では明治維新の史的意義を顕彰する動きが始まっている反面、これに楔を打つかのように、幕末維新の歴史を、単なる利害衝突や権力闘争の歴史として切り捨てよう



な言説も流布している。そこで著者は本作の「補論」において一節を割き、歴史を高めから批評するのではなく、崇高な大義を掲げて歴史を切り開いた先哲を謙虚に仰ぎ見る姿勢の重要性を強調している（原田伊織『明治維新という誤り』批判序説）。

本作が、閉塞感にあえぐ現代の若者にとって思想的な発火材になることを期待するものである。

## 活動報告

八月三十日、『崎門学報』第七号を発行しました

九月十六日、念願叶って垂加霊社がある下御霊神社（京都市中京区）に参拝致しました。垂加霊社は山崎闇斎先生の御霊を祀り、境内にある庚申社

と相殿になっております。

また境内には、闇斎先生

の御祖父が唱

えられたとい

う三社託宣の

三神、すなわ

ち天照大神、

八幡大菩薩、

春日大明神も

祀られており



下御霊神社

ます。下御霊神社は御所のすぐ南に鎮座ましまし、猿田彦の教えを今日に伝えております。



垂加霊社（上、左上）



託宣三社（上）

九月十七日、朝から崎門と関わりのある有馬新七先生殉難の地である伏見の寺子屋を見学し、更に寺田屋事件で討死された有馬先生を含む殉難九烈士の墓所がある大黒寺にお参りしました。ただ、寺子屋は坂本龍馬の展示ばかりで有馬先生に関するものは、先生が串刺しにされたという階段下の白壁位でした。また大黒寺は寺田屋から徒歩十分位の距離に

あり、薩摩藩の菩提寺であることから通称薩摩寺とも呼ばれます。九烈士の墓は西郷隆盛が建てたそうです。



有馬新七墓（左）

寺田屋（右）

有馬新七殉難現場（左）



九月十八日、京都から近鉄線とJRを乗り継いで三輪まで行き、大神神社に参拝しました。この神社は、大物主大神（おおものぬしのかみ）を御祭神としてお祀りし、大神が三輪山に鎮まられたことから、三輪山そのものを御神体としてお祀りしております。

記紀伝承によると、大物主大神は、大国主神

の幸魂（さきたま）、奇魂（くしたま）として現れ、

垂加神道ではこれは大神の「心神」を表すものであると解釈しております。車窓に広がるのどかな田園と三輪山の風景は、瑞穂の国たる我が国の原初の姿を今に留めていました。

ちなみに、聞くところによると、土佐崎門派の谷秦山も、大物主大神の末裔だそうです。奈良ではその後、興福寺や東大寺、春日大社などを参拝しました。

十月一日、第四回『靖献遺言』を読む会を開催しました。



三輪山の景色



大神神社



# 崎門列伝⑧唐崎常陸介 (当会顧問) 坪内隆彦

## 崎門学が唐崎家の家学

本連載では、十八世紀半ばの朝権回復運動に対する弾圧事件（宝暦、明和、安永事件）を何度か取り上げてきた。宝暦事件は、宝暦六（一七五六）年に桃園天皇へ進講した竹内式部が追放された事件、明和事件は明和四（一七六七）年に『柳子新論』を書いた山県大武が処刑された事件、そして安永事件は安永二（一七七三）年に崎門に連なる公家に対する一斉檢舉事件である。

前回取り上げた高山彦九郎の行動が、この三事件で斃れた先人の魂を引き継いだものだったことは、唐崎常陸介（士愛）の生涯を知ることによってさらに明瞭となる。

唐崎家は代々、広島県竹原市にある磯宮八幡神社の神官を務めてきた家系である。磯宮八幡神社は万治元（一六五八）年に、唐崎正信が宇佐神宮のご神託を受け、この地に遷座されたとされている。

正信の長男・定信（常陸介の曾祖父）は、延宝年間（一六七三〜一六八一年）に、垂加神道の奥義を山崎闇斎から学び、これ以降、磯宮八幡神社は崎門学と深い関係を持つことになった。

竹原図書館長を務めた村上英は、「山崎学は唐崎の家学である。…竹原一郷は唐崎一派

の先導によつて殆ど総ての智識階級は山崎学派の人々で満たされてゐた」と書いている『唐崎常陸介』広島県教育会、昭和八年）。

ところで、南宋の忠臣・文天祥の真価は、浅見綱斎の『靖献遺言』によつて広く知られるところとなったが、すでに闇斎の読書節記『文会筆録』に文天祥に関する記述があったことが注目される。闇斎は門人に文天祥の真価を伝えていたに違いない。それを裏付けるように、定信は闇斎に自ら織った木綿布を贈った返礼に、闇斎から文天祥筆の「忠孝」の二大文字を授けられていた。この「忠孝」の二文字は、唐崎家の宝として受け継がれ、朝権回復運動のシンボリックな役割を果たしていくことになる。

さて、定信は子の清継を、元禄年間（一六八八〜一七〇四年）に、闇斎直流の高田末白に学ばせている。清継の子・辛斎（信通、常陸介の父）は、享保年間（一七一六〜一七三五年）に、闇斎門下の梨木桂斎（鴨祐之）や、闇斎門下の植田良背の弟子鹽谷志帥に師事、さらに谷川士清にも学んでいる。士清は玉木正英（葦斎）から垂加神道を学び、『和訓栞』を著したことで知られる。

ちなみに、『日本外史』を著した頼山陽の祖父・頼亨翁（惟清）は、竹原で紺屋を営んでいたが、崎門派と交わり、晩年に士清に師事している。つまり、唐崎辛斎と同門ということになる。亨翁は小半紙に「忠孝」の二文字を書いて守袋に収めていた。この二文字は、

定信が闇斎から授けられたものに違いない、そして、山陽の父・春水もまた、崎門の学の影響を受けていたと考えられる。頼成一は、「春水は少年時代から垂加派の主義思想を脳裏に深く強く焼きつけられてゐたに違いない」と書いている。

## 文天祥筆の「忠孝」の二文字

元文二（一七三七）年に生まれた唐崎常陸介は、寛延四（一七五二）年頃、父辛斎と同様に、谷川士清の門に入り、宝暦七（一七五七）年まで、約七年にわたつてその薫陶を受けた。村上英は、常陸介は竹内式部とも交流があったと指摘している。

宝暦十二（一七六二）年、常陸介は突然、代官所から閉門を命ぜられ、藩外へ出ることを禁止された。この国止めは、寛政四（一七九二）年まで三十一年に及んだ。竹内式部の宝暦事件に関与する人物として警戒されたということである。

しかし、常陸介は怯むことなく尊皇の大義を実践し続けた。明和三（一七六六）年頃、磯宮八幡宮境内の千引岩に、曾祖父・定信が闇斎から授けられた文天祥筆の「忠孝」の二文字を刻印している（下写真）。

小倉藩校教授・石川彦岳は「忠孝二文字の記」で、以下のように書いている。

「……夫れ人倫の大本は此二字より先なるはなし。百行の源、万善の生ずる所、真に是在り、世の人、幼より老に至り執か朝夕之

を口に之を筆にせざらんや、人君、人父、此を以て臣子を責め、宿儒書学、此を以て後生を訓ゆ、極論切諭、諒々として已まざるも亦唯是の二字。然して徒に之を言ふて踐む能はざるもの天下皆是れなり、吾人豈惴然懼懼せざらんや。今、文山（文天祥）、忠肝鐵石、奮發義を唱へ、万死を出でて一死に就く、而して後此書益々崇し、則此の書を見るは何ぞ其人に対するに異ならんや。忠烈の氣、凜々紙表に溢れ、絶て撓屈の態なし、蓋其作正氣歌と同時に運筆か、嗚呼、君も亦奇士なるかな、物に掲ぐれば則ち靈境に於いてし、不朽を貞珉にはかり、人をして激励する所あらしめんと欲す、夫の近世の好事、碑を古墟勝地に立て、妄に不經の言を勒し、己が姓名を售るものと、安ぞ同日にして語るべけんや。亦以て君の赤心を観るべし……」



唐崎常陸介が刻んだ磯宮境内の忠孝岩



一方、常陸介の講義を聞いたある者は、「神書の巻、講じ給ふ末席に連る、忠孝の教をしめし給ふ時は、声くもり落調し給ふ、至誠の全き、つたなき我等まで胸もふたがる程に覚えて、いみじさ云ふもはばかりあり」と語っている。村上英は、この言葉を引き、「如何に先生（常陸介）の言々句々が人の肺腑につき、聴くものをして襟を正さしめ、靡然<sup>びぜん</sup>として其の嚮ふ所を知らしめたかゞ判る」と評している。

常陸介はまた、闇斎顕彰のために奔走した。天明元（一七八一）年には、闇斎歿後百年を機に、霊社を建立しようとして江戸に赴いたが、残念ながら実現には至らなかった。同年秋、竹原に戻った常陸介は、次善の策として垂加翁の顕徳碑建立を目指した。これも、実現には至らなかった。しかし、磯宮境内、天神社の相殿として垂加霊社を奉祀し、十一月二十二日には神殿において百年祭を厳修している。

禁足時代の常陸介を助けたのが、竹原の豪商・吉井家の六代目当聡であった。当聡は町浜年寄の立場でありながら、常陸介に積極的な経済的援助を行い、その結果入牢を命じられている。

小早川の家臣だった吉井家は、源兵衛正純の時代に竹原に移住、屋号を「米屋」と定め、商いを始めた。寛永十一（一六三四）年頃には造り酒屋を営み、塩田の経営を始めている。さらに、寛文十（一六七〇）年には塩問屋を

営み、元禄十六（一七〇三）年には塩輸送を中心の廻船業を始め、竹原随一の豪商に発展していった。

ただし、当聡は単に財力があっただけではない。彼は、常陸介の父・辛斎とも縁のある崎門派の植田良背に儒学を学んでいたのである。まさに、当聡と常陸介は、崎門の精神によつて結ばれていたのである。また、吉井家は頼家との関係も深く、春水の広島藩儒登用にも協力していたという。

吉井家文書の調査を行った、広島県立文書館の西向宏介氏によると、吉井家文書には「唐崎文庫」、「頼文庫」、「頼春水登用一件」と題する文書が残されている。また、当聡関係の文書として、「小学外篇聞書」、「大学講義」など、当聡が植田良背に学んだ享保期の講義聞書メモなどが数多く残っているという（「近世商家の筆筒収納文書―安芸国竹原町吉井家の事例―」）。

### 常陸介の最期

常陸介が聖護院法親王の邸で、偶然にも彦九郎と対面したのは、寛政三（一七九一）年六月二十九日のことである。未だ常陸介は禁足処分を解かれていなかった。禁足故に、自由に動くこともままならず、彦九郎の存在を知りながら、対面はこの日まで叶わなかった。ついに対面を果たした常陸介と彦九郎は、手を取り合い、「天下の事、何すれぞこの極に至るや」と泣きながら語り合ったという。

その直後、常陸介は彦九郎とともに、光格天皇の侍講・伏原宣條<sup>ふしはらののぶた</sup>に拝謁した際、「忠孝」の二文字の拓本を献上している。以来、常陸介は常にこの拓本を持参し、いたるところでそれを示し、泣いて忠孝の大本を説いたという。

前回詳しく書いた通り、彦九郎は、光格天皇の実父典仁親王への尊号宣下実現のために果敢に動いていた。その際、最も確かな後ろ楯が崎門の人脈であった。

常陸介は彦九郎と対面する前年の寛政二年に、九州各地を遊説していた。そのとき、拠点となったのが久留米の上妻である。この地では、浅見綱斎の門人・合原窓南が崎門の学を伝え、窓南門下から宮原南陸・桑州親子、不破守直といった人物を輩出した。ちなみに、真木和泉は若き日に宮原桑州に師事している。不破は、窓南のみならず、西依成斎、谷川士清にも師事していた。

久留米に入った常陸介は、不破守直の門人・有馬守居の別荘「即似庵」に迎えられ、崎門派の尾関守義、不破実通、田代常綱、吉田玄蕃、森嘉膳と結んでいる。吉田は、上野国小幡藩織田家の家老で、明和事件で斃れた山県大式を小幡藩に招いた人物である。

まさに、常陸介は宝暦事件のみならず、明和事件の挫折を乗り越えんとする志を共有していたのである。

彦九郎は、常陸介が築いた崎門派の人脈を頼りに、寛政三年七月に九州へと向かった。

しかし、彦九郎の運動は徳川幕府によって阻まれた。寛政五（一七九三）年、彦九郎は自決に追い込まれたのである。常陸介は、彦九郎の遺志を継ぎ、「柄崎八百道」と変名して同志の糾合を試みた。しかし、常陸介の運動もまた、彦九郎の運動同様に、幕府によって抑え込まれたのであろう。寛政八（一七九六）年十一月十六日、長生寺境内の先祖の墓前で切腹、十八日絶命した。



唐崎常陸介の墓

常陸介は三十一年に及ぶ禁足に屈することなく、朝權回復運動に人生を捧げたのである。内田周平は、勤皇の事業に最も尽力貢献して人物として、桃園天皇時代の竹内式部、光格天皇時代の唐崎常陸介、孝明天皇時代の梅田雲浜、有馬新七を挙げている。

常陸介が自刃してから九十五年後の明治二十四（一八九二）年十月、後に内務大臣などを務める末松謙澄は、深く常陸介の事跡に感じ、「忠孝」の拓本を天覧に供し奉った。明治三十一年には、常陸介に正四位が追贈されている。昭和二十八（一九五三）年、吉井家の章五翁と竹原出身の村上定の発案により、常陸介の顕彰碑が磯宮八幡神社境内に建立された。

# 中沼了三先生 生誕二百年に際して

折本龍則

※本稿は、昨年平成二十八年に執筆したものです。本号の発行が遅れたため、歳を越しての発表となりました。

## 中沼了三先生生誕二百年

今年（執筆当時）、平成二十八年は、明治天皇の侍講を務めた中沼了三先生（一八一六～一八九六）の生誕二百年である。中沼先生は、幕末明治に活躍した儒者であり、孝明天皇と明治天皇の侍講を務められた。先生は山崎闇齋の学統を継ぐ崎門学者として、朝野の志士を教導し、自らも忠臣としての清節を貫いた。

本年、先生の生誕二百年にあたり、中沼郁氏著、中沼了三先生顕彰会編の『中沼了三伝』が再刊された（同著によると、中沼郁氏は、了三先生の兄の曾孫にあたるとお方で、了三先生を知る第一人者でいらしたが、平成十三年に逝去された）。他、先生の郷里である島根県隠岐の島では僅かながら記念行事が催された由である。いまでも中沼先生の名を知る人は少ないが、明治維新に功績のあったこの偉人の事績を風化させてはならない。そこで以下では上述した『中沼了三伝』の他に、その主たる依拠となったであろう『故贈正五位中沼了三事績』をもとに、先生の生涯を概述す

る。

中沼了三（以下敬称略）は、文化十三年（一八一六）年八月、代々医業を生業とする中村家の父養碩の次男として生まれた。兄の龍之介（号秋水）は、京都に出て鈴木遺音に入門した。この遺音は、学を山崎闇齋の正系たる西依成齋に受けた父潤齋の門を継ぎ、尊卑内外の大義を正す崎門学を説いた。兄秋水が、遺音の門に入った理由は定かでないが、もともと玉若酢命神社の神主である隠岐幸生が京都で西依成齋に師事したこと、隠岐に崎門の学風が広まっていた可能性も考えられる。了三もまた兄にしたがって天保六年、遺音の門に入り、学業の研鑽に励んだ。了三は、師の遺音に対して、自ら薪水の労を採る等、忠実に仕えたことから、遺音もまた深く了三を愛し、養子に迎え入れようとしたこともあったが、了三は義に合わざるとしてその申し出を断ったという。



中沼了三肖像

天保十四（一八四三）年から京都で学舎を開き、子弟を教育すること十数年に及んだ。彼の門人には、薩摩の西郷従道や川村純義、桐野利秋、鈴木武五郎、土佐の中岡慎太郎、

肥後の松田重助など多くの志士が名を連ねた。その後、安政文久年間に至って内憂外患交々至り、勤王の志士次々と蹴起したが、了三は出処進退を慎み幕府の難を逃れた。

これより先、仁孝天皇は公卿の子弟を教導するための学校として学習院を設けられ、了三は次の孝明天皇によって、教授に任ぜられた。いわば朝廷お抱えの儒者になったわけである。このとき、了三が『書経』の講義をし、さらに孝明天皇の侍講を拝命したことが『学習院史』に記されている

## 十津川郷土との深い因縁

そんな中、尊皇の気風で知られる大和の十津川郷土が了三のもとを訪ねて来た。この十津川郷土は、南北朝時代に後醍醐天皇をお助けし、忠勤に励んだことから、朝廷より地租を免ぜられ、郷土と名乗ることを認められるなどの殊遇を賜った。彼等は、天下騒然たるいまこそ報恩の秋と断じ、了三の高風を慕ってその指南を仰ぎに来たのである。了三はその志を諒とし、朝廷に周旋した結果、十津川郷土は遂に朝廷の直轄として禁裏守護を命じられた。さらに孝明天皇は、十津川に文武館創設の御沙汰を賜り、元治元年、十津川折立村の松雲寺に文武館（現在の県立十津川高校）が創設されると、了三は教授として迎えられ、

了三の長男、清蔵や三男の璉三郎もまた了三の後を受けて教授の任に当たった。こうしたことであったから、郷土による諸藩との交際

や、内務などは悉く了三の決裁を仰いだという。（左は文武館、現在の十津川高校（下））



慶応元年(1865)文武館は折立村平山に移転(写真は天保期の平山校舎)



現在の十津川高校

慶応三（一八六七）年、朝廷において大学建設の議が起るや、了三は、楠本謙三郎、号碩水と共に創設に尽力し、明治元年に創設された漢学所の講師を命じられた。了三は明治天皇の御前で『大学』を講義したが、一平民の身を以て天皇に講義したのは彼が初めてのことであったという。

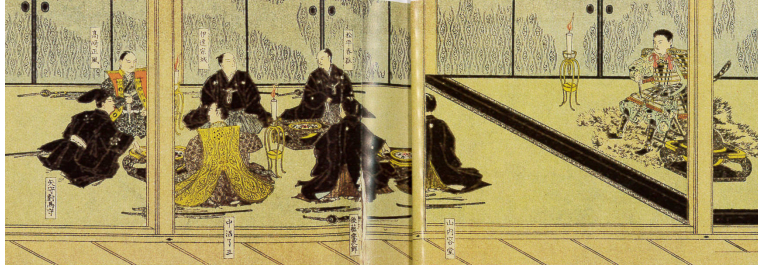
しかし、こうした活躍はやがて幕府の目に触れ、了三の弟子であった西川耕蔵という人物が寺田屋騒動に連累して幕府の取り調べを受けた際に、迂闊にも彼の名を口にしたことから、捕吏の追求を受ける処となった（この西川耕蔵は、梅田雲浜の弟子でもあり、安政の大獄に際して雲浜の妻子を助け、天誅組に資金的援助をした人物としても知られる）。身の危険を感じた了三は、夜半に家を抜け出し、かねてより縁のあった十津川に潜伏して難を逃れたが、幕府はその後も、幕府の搜索は止まず、了三と親交のあった西郷隆盛は弟従道を十津川に遣って帰京を勧めた。かくし



て了三が京都に戻る途中、徳川慶喜による大政奉還の報に接し、彼は欣喜雀躍して無事の入京を果たしたのである。時に慶応三年十月のことであった。

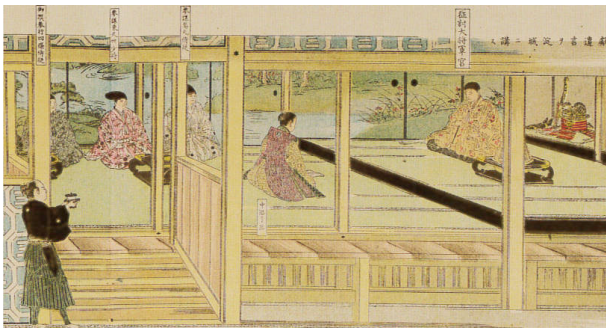
### 明治政府の参与、征討大將軍の参謀となる

同年十二月、王政復古の大号令が発せられると、朝廷では新たに総裁、議定、参与の三職が置かれ、総裁には有栖川宮熾仁親王、議定には仁和寺宮嘉彰親王（後の小松宮彰仁親王）、山階宮晃親王、松平春嶽、中山忠能、正親町三条実愛、徳川慶勝、山内豊信等の親王公卿諸侯、参与には岩倉具視、大原重徳、西園寺公望、西郷隆盛や大久保利通、伊藤博文、井上馨、木戸孝允、後藤象二郎等と云った名だたる維新の功労者に加えて、一般の有能者のなかから了三が拔擢された。さらに明治元年、戊辰戦争が勃発すると、了三は大久保等と共に、征討大將軍に任じられた仁和寺宮の参謀として軍議に参画し（下絵）、鳥羽・



伏見の戦いに赴いた。

これより先、天資英邁を以て聞こえた仁和寺宮親王は、了三を召して救国済民の志を告げられたことがあった。これを聴いた了三は深く感激して、居を親王の住まいがある御室山に移し、親王の伴読を務めるようになった。その際、講読の度に、親王は近習を一人従えて了三の居に赴かれたという。当時、公卿ですら一平民の居宅を訪うなど稀であった時代に、ましてや皇族が赴くなど極めて異例のことであった。了三は親王に経史を講読することみならず、時にはその奢侈贅沢を諫めることも敢て辞さなかった。かくして、親王と了三は、深い信頼で結ばれ、親王はその絆の証として、大和錦の御直衣をあつらえた陣羽織を了三に賜った。後に了三が仁和寺宮征討大將軍の参謀として軍議に参じた際に着したのがその陣羽織である（前掲の肖像画）。



仁和寺宮征討大將軍に『靖献遺言』を講義する了三

本陣において、親王の御前で、山崎闇齋の高弟である浅見綱齋が著した『靖献遺言』を講義している。『靖献遺言』は、綱齋がシナ八人の忠臣の事績と遺言を編述した書であり、君臣内外の大義を高唱することで知られる。このとき了三は、本書にある諸葛亮の「前出師表」を講じたとき、その席には東久世道禧や烏丸光徳等、多くの参謀や公卿が陪席し、陣中の士気は大いに上がったという。また、了三が陣中で腰に佩していた刀は、「赤心報国」と銘の入った浅見綱齋伝来の名刀であり、いまその行方は分らないが中沼家に写真が残っている。

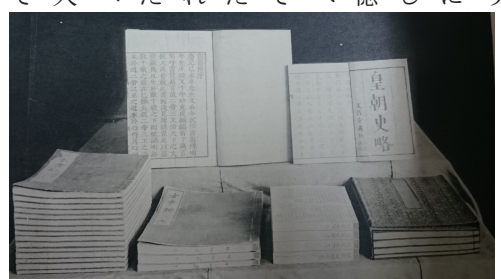


「赤心報国」の銘刀

### 明治天皇の侍講となる

帰京の後、了三は、和歌山城の受城使（明け渡された城を接収する使者）を拝命した。明治二年正月には、それまでの漢学所御用掛と兼ねて明治天皇の侍講を拝命し、特旨によって従六位下に叙せられた。さらに同年三月、天皇が東京に奠都し行幸されると、了三もこれに従い、東京で進講を再開した。彼は、斎戒沐浴してから朝廷に出仕するのを日課とし、四書を始め『詩経』や『大学衍義』など

を講じた。こうも、幼少にまします天皇の君徳を輔導し奉るべく、事に触れて忠言を開陳したが、天皇はこれを嘉納し給うたという。同じ頃、明治新政府の大学政策によって昌平黉が昌平学校に改められると、了三は一



明治天皇に講義したとされる『詩経』（中央上）

等教授に任命された。『明治天皇紀』にある了三の侍講日記は、彼が侍講に任命された明治二年正月から三年六月で終わっているが、これは了三の意見が欧化路線を進める親政府の方針と齟齬を来し、三条実美や徳大寺実則等、政府の重臣達と決裂したことが一因とされる。明治三年十二月、彼は病気を理由に官を辞した。

こうしたなか、明治四年三月、了三は突如政府に拘束され、東京の薩摩藩邸に身柄を預けられた。一説によると、これは政府に不満を持つ了三が、横井小楠暗殺事件と岩倉具視暗殺未遂事件（二卿事件）への関与を疑われたことによるものとされる。結局、嫌疑は晴れて釈放されたが、位階は返上させられた。この事件の後、了三は家族を連れて京都に帰り、東山如意ヶ嶽の近くに居を構えて私塾を

開き、門弟を指導した。しかし西郷下野以後の緊迫した情勢のなかで、了三は西郷と親交があったことを理由に再び嫌疑を受け、長男清藏・三男璉三郎と共に身柄を拘禁されたが、結局釈放された。

それから時は過ぎ、明治十五年、了三は清藏と璉三郎を連れて大津に行き、「湖南学舎」という名の塾を開いた。これは当時滋賀県令で、後に元老院議員、初代鳥取県知事となった籠手田安定が、前述した楠本碩水の門下であったことから、了三の高名を慕って開校を斡旋したものであり、了三が主管、清藏が教授、璉三郎が撃剣の教師を務めた。

明治二十一年、岩倉具視は久しく了三を誤解していたことを悔い、再び仕官を乞うたが、了三は病氣と老齢を理由にこれを固辞した。明治二十二年、政府は維新への功労を謝し、宮内省より特旨を以て了三に一箇年二百年の年金を賜ったが、これは岩倉のとりなしであったという。そして、明治二十九年五月一日、了三は京都の東山浄土寺村の自宅で



京都安楽寺にある了三の墓

八十一歳の生涯を閉じた。亡骸は近くの鹿ヶ谷安楽寺に埋葬され、同寺には今も了三の墓が静かに佇んでいる。墓石には「中沼葵園先生墓」と銘記してあるが、「葵園」とは了三の号で、いつも太陽の方を向いている葵に因んで付けたとされる。いかにも了三らしい、純忠至誠の面目を偲ばせる。

### 闇齋と垂加 山崎闇齋先生の号に学ぶ (愛媛県師友会ひの会) 三浦夏南

山崎闇齋先生は二つの号を持っておられる。一つは朱子学者としての闇齋という号であり、もう一つは神道家としての垂加という号である。闇齋は先生の尊崇された朱子の号である晦翁・晦庵に倣われたもので、晦はつごもり、月がなくて暗いという意味であり、自らの学識が暗く、未熟であるので益々学に励み向上しなければならぬという自戒の号である。闇という字も灯がなく暗いという意味で、朱子の号と同じ自戒の号である。一方、神道家としての垂加という号は山崎闇齋先生『自賛』の中の「神垂祈禱冥加正直」という言葉に由来する。この言葉は伊勢神道の古い神道書に見え、先生が特に大切にされた言葉である。「神垂祈禱冥加正直」とは、神の垂れてくださる目に見えない御加護は、ひたすらに祈り、神から賜ったままの正直な心を守る

ることによってのみ受けることができるという意味である。

この二つの号を見る時、己を戒め、ひたすらに道を求める闇齋という号と、己の全てを神の御心に捧げ、大安心の境に至る垂加の号は一見趣が異なるように思う。しかし、この闇齋と垂加の号は表裏一体不可分であり、私は闇齋の号の義烈の極みに垂加の号の仁愛がにじみ出るところに崎門学の求道の生命を感じるのである。

宇宙に満つる道がこの身に宿り性となる。それは神のいのちであり、天之御中主神の分霊であり、天照大神の「ひ」である。その「ひ」ここに止まりて「ひと」となる。この神のいのちを先生は心神と呼ぶ。この心神の尊さに畏むが故に、その無限力を直観するが故に、今この現世にあらわれた自分に至らなさを感ずる。神の御舎である心を清め祓い、本来の我であるところの心神をこの現世に全く映し出さねばならぬという内奥の叫び、この叫びこそ闇齋という号そのものである。自然を当然とする努力、天の誠を誠たらしめる努力、この飽くなき求道の精神こそ崎門学の特長である。しかしながら、己の魂を清めんと欲すれば欲するほど、祓い難きは心中の賊であり、迷いのところを省こうと反りみて、迷いのところに逆に捉われてしまう。真の己たらんとするその意気が、その力みが却って自力を頼む心を強くし、真の己に達することができない。そこに、求めるものと求められるものと

の相対性を脱した神への絶対の帰依、「神垂祈禱冥加正直」の言葉が立ち現れる。そこには絶対の安心がある。ただ天照大神様の母なる無条件の愛のみがある。大楠公が「カリニモ君ヲ怨ミ奉ルノ心發ラバ、天照大神ノ御名ヲ唱フベシ」と仰せられた心もここにある。ここまで神に向かい切った時、闇き己はもはやなく、六合に輝き渡る真の己、神なる己のみが厳然と聳え立つのである。この精神こそ垂加の号そのものであり、若林強齋先生の守中の号もここに淵源があるものと信ずる。まさに闇齋、垂加の号は文天祥『衣帶中の贊』の「惟其義盡、所以仁至」のこころである。義を極めつくしたところに初めて本心の仁に至る。飽くなき求道の極みに真の祈りと救いは成就するのである。

崎門学を決して理論として捉えることなく、生きた求道の姿として捉え、先生の歩んだ道をまた自分も歩みたい。闇い闇い自分であるからこそ先生を慕って歩まずにはおられない。この闇齋の心こそ、光明燦然たる垂加の世界に入るたった一つの道であると信ずる。このこころを片時もはなすことなく、益々学に努め、内なる心神を皇国の御為に発揮することを期して拙文を終えたいと思う。

## 崎門学研究會



## 意見

### 安倍首相は 承詔必謹せよ

昨今における今上陛下の御譲位の問題に関して、政府は一代限りの「退位」（譲位）を認める特例法を制定する方針であるとの報道がなされ、政府の「有識者会議」もこうした政府方針をにじませる内容の「論点整理」を公表した。しかしこの方針について、政府は二つの重大な過ちを犯そうとしている。

第一に、陛下は御譲位について一代限りではなく、恒久的な制度化を思召されているということだ。陛下による先の八月八日の「御言葉」を素直に拝聴すれば、それが将来の天皇を含む「象徴天皇」一般の在り方について述べられたものであることは明らかである。第二に、譲位を一代限りで認める特措法は、現行憲法第二条で、皇位は「国会の議決した皇室典範の定めるところによる」とし、さらにその皇室典範の第四条で、皇嗣の即位は「天皇の崩御」によるとする規定に違反する。

本来、我が国の皇位は「天壤無窮の神勅」に基づき、現行憲法が規定するような「主権者たる国民の総意」に基づくものではない。したがって、皇室典範は憲法や国

会に従属するものではなく、皇位継承の決定権も、一人上御一人に存する筈である。しかしながら、その上御一人であらせられる陛下が、現行憲法の遵守を思召されている以上は、この度の御譲位も憲法の規定に従う他なく、それに違反する政府方針は御叡慮を蔑ろにするものといわざるを得ない。

安倍首相以下、我々国民の義務は承詔必謹、ただ陛下の御主意に沿い奉り、御宸襟を安んじ奉ることのみ存するのであつて、一度発せられた陛下のお言葉を歪曲する様な行為は絶対に慎まねばならない。特に、この度における御譲位の思召しは、陛下が将来の天皇のあるべき姿について、長年、熟慮に熟慮を重ねられた上で、御聖断遊ばされたことであり、首相以下我々国民の側にいかに合理的な理由があるといえども、臣下の分際で反対する資格はない。

ところが、先の「お言葉」にもかかわらず、政府は陛下のご主意を真摯に受け止めず、「二代限りの特措法」という姑息な対応に終始しているのは大変遺憾である。また上述した政府の「有識者会議」

では、一部の出席者から公然と譲位に対する反対や慎重意見が噴出したが、異論があるなら、前もって陛下に諫奏申し上げるのが筋であり、後から言うのは不敬

千万である。有識者会議は首相の私的諮問機関といえども、安倍首相の政治責任は免れない。有識者会議の結論が出るまでに政府方針が明らかになるというのも倒錯した話であるが、何れにしても一連の対応を見る限り、政府は「一代限りの特措法」という結論ありきで事を進めていると思えない。

有識者会議での議論を踏まえた「論点整理」では、退位の課題の一つとして、先帝と新帝の間における「象徴と権威の二重化」が挙げられているが、同様の問題は「論点整理」自身で記されているように、国事行為の臨時代行や摂政の設置によっても起こりうる。また、「論点整理」では、退位が将来の全ての天皇を対象とする場合の課題として、「恒久的な退位制度が必要とする退位の一般的・抽象的な要件が、時の権力による恣意的な判断を正当化する根拠に使われる」ことが挙げられているが、「時の権力による恣意的な判断」は、退位が今上陛下のみを対象とする場合に、「後代に通じる退位の基準や要件を明示しない」ことによっても引き起こされるのである。

このように、有識者会議が「論点整理」で示した、摂政か退位か、退位は全ての天皇か、今上陛下限りか、という問題は賛否両論の立場に一長一短あり、結論を

一決しがたいのであり、だからこそ我々首相以下の国民は、こうした国論を二分しかねない問題については、最終的当事者であらせられる陛下の御裁断を仰ぐほかないのである。したがって、譲位を実現する法形式についても、一般的な特例法の制定以外に、皇室典範の付則に根拠規定を置いた上で特措法を制定する方法や、皇室典範を改正する方法が挙げられているが、政府は陛下に奏聞してご意見を承り、あくまで陛下のご主意に沿い奉る方式での実現を目指すべきである。

かつて孝明天皇は、御叡慮に反して通商条約に調印した徳川幕府に御震怒遊ばされ、諸藩に下された密勅の中で、幕府による「違勅不信」の罪を咎められた。これにより朝幕間の齟齬軋轢が天下に露呈したことで、尊皇倒幕の気運が激成し、幕府崩壊の端を開いたのである。このように、我が国における如何なる政府の正当性も、天皇の裁可に基づくのであつて、「象徴天皇」を「国民の総意に基づく」と規定する現行憲法ですら、その時の天皇の裁可に基づいているということを安倍首相はゆめゆめ忘れてはならない。

以上の趣意により、安倍首相及び政府は、一切の予断を排し、承詔必謹して陛下の御叡慮を具現し奉り、一刻も早く御宸襟を安んじ奉るべきである。